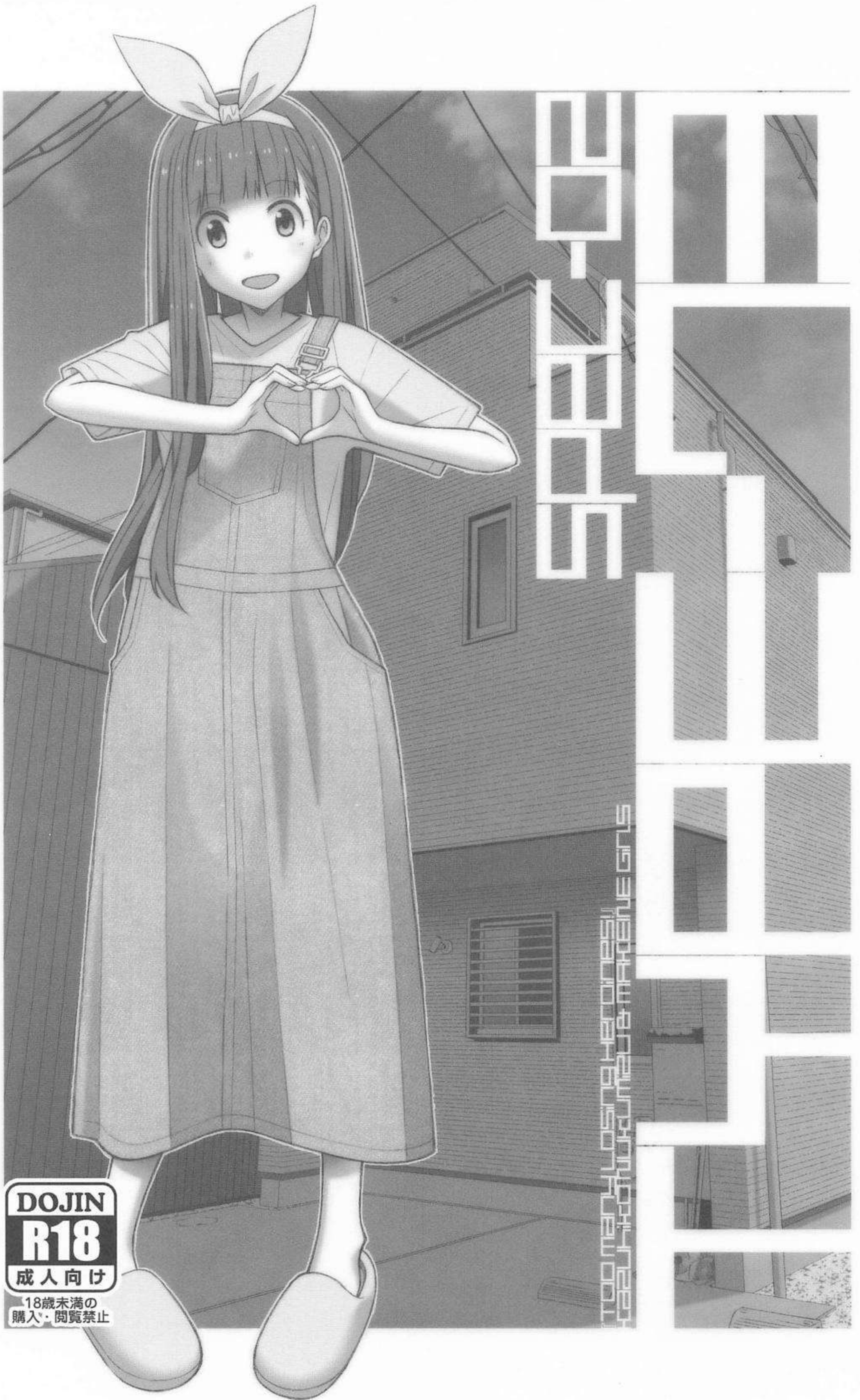




DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止



「おはようございます
お兄様♥」

リビングに入ってきた俺に
実の妹である『温水佳樹』が
元気に挨拶をしてきた

「今朝はパンケーキに
挑戦してみたいんです」

「楽しみに
待っていて下さいね♥」

寝ぼけ眼の俺は
せつせと働く妹の姿を
何気なく眼で追っていた

手持ち無沙汰を
感じた俺は

邪魔にならない程度に
手伝いをする

甘い匂いを漂わせる
出来上がったばかりの

パンケーキを
テーブルの上に置くと

俺と佳樹は一緒に
食べ始めた



「お兄様？パンケーキの
お味はどうですか？」



嬉しそうな
表情をした佳樹が

クルリとこちらに
向き直る



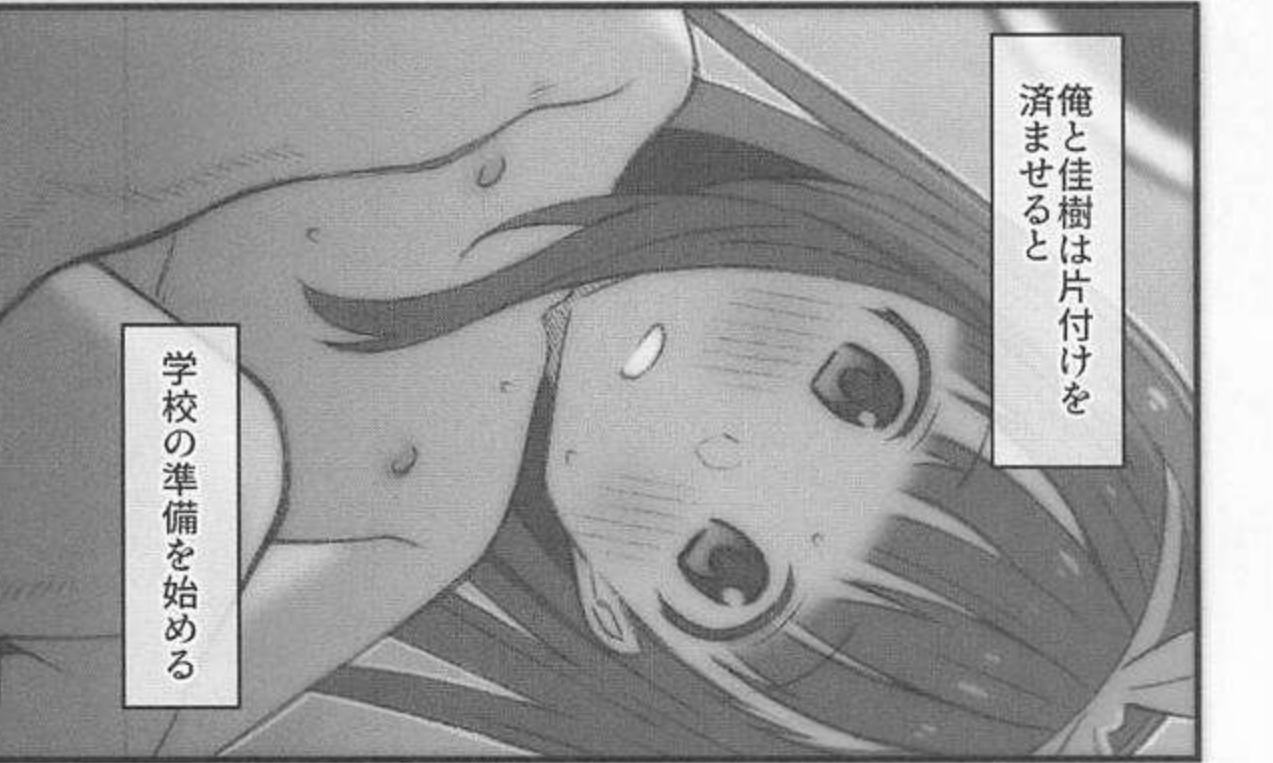
俺は称賛の言葉を
伝えると

ご褒美として佳樹の頭を
優しく撫でて上げた



そして俺の頬に付いた
クリームを

指先ですくい取り
舐め取ってしまった



俺と佳樹は片付けを
済ませると

学校の準備を始める

さあ今日も長い一日が
始まりそうだ

文芸部は夏の合宿で

『強制ヌードイストビーチ』
に来ていた

俺と『八奈見杏菜』は
ビーチパラソルの下で
休憩をしている

俺がチラリと八奈見さんを
観察してみると

頬を染め波打ち際を
見詰めているようだった

見詰めている先が気になった
俺も視線を向けてみると

そこでは玉木部長と
月之木先輩先輩が

海の中でセックスをしている
真っ最中の場面だった

「ねえ温水君：私達も
セックスしない？」

荷物を脇に移動させ
スペースを確保すると

八奈見さんが仰向けに
寝転がる

俺達が『青姦ショー』を
始めることに気づいた

ギャラリイ達が
徐々に集まってくる

「見られながらのセックスって
ちょっと恥ずかしいね♥」

衆人環視の元

俺と八奈見さんは
シックスナインを始めた

「ん…ッんうッんうッ」

俺は八奈見さんのマンコに
舌を這わす

ペニスに感じる
刺激を意識しながら

「私の彼のより大きい♡」

「あのオッパイでパイズリ
して貰いたい♡」

といった声がギャラリィから
ちらほらと聞こえてくる

周りの声援に
気を良くした俺は

八奈見さんに断りもなく
膣口^なに指を突っ込む

太陽の光が奥まで届くよう
強く膣口^なを開くと

「ぬ…ッ温水君
そんなに広げちゃ駄目ッ!!」

ヒクヒクと動く
子宮口が顔を覗かせる

するとギャラリィ達から
大きな歓声が上がった

爽やかな青空の下

俺と八奈見さんは
セックスを始めた

「こんな開放的な場所だと
ドキドキするね♥」

俺の上に乗った八奈見さんが
自ら腰を上下に動かすと

結合部分がヌメヌメと光
淫靡な音を響かせる

「食欲と性欲を楽しむのって
とても大事だと思わない？」

そう言う八奈見さんは
自らのオッパイをかぶり付き

妊娠もしてないのに
母乳なんて出ないでしょ

チュールチュールと
乳首に吸いついた

「あ……ッ」

八奈見さんの異変に
気づいた俺は彼女の
視線の先に目を向ける

そこには海から戻ってきた
焼塩と小鞠が

頬を真っ赤にして俺達を
見守っていたのだった

「あッあッあッ
激し過ぎだよ温水君♡」

腰使いで八奈見さんを
絶頂させたい俺は体位を変える

八奈見さんの腕を後ろ手に引き
腰を前後に大きく揺すった

徐々にペースを上げた
俺の腰使いで

八奈見さんのお尻に
肉の波紋が広がる

「ああッ絶頂ちゃう♡
絶頂ちゃう♡」

沢山のギャラリーに
見守られながらながら
絶頂を迎える八奈見さん

限界に達した俺も
八奈見さんの尻に強く腰を
密着させ欲望を解き放つ

「温水君の熱い精子が
私の子宮に注ぎ込まれてる♡」

次第に『青姦ショー』を観ていた
ギャラリー達が散ってゆくと

最後に残ったのは焼塩と
小鞠の二人だけになった



「見て…ぬっくん♥」

「今日の為に
買ってきたんだよ」



今度はニットを捲り
日焼けしていない胸を
俺に見せてくれた

周りに人が居ないとはいえ
大胆なコトをする焼塩は

勝負下着を見せてきた



商業施設の裏に入った
『焼塩檸檬』がスカートを捲り



「あ…ッ!？」

焼塩を突き上げるかのように
俺は膣内へと侵入した



「さ…っ触ってくれる？」

日焼けをしていない
焼塩の胸はきめ細やかな
肌触りをして

より一層エロさを
醸し出していた

「は…あ…ぬっ…くん」



いつもと違う焼塩の姿に
股間を隆起させた俺は

焼塩のパンツを脱がせると
チンポを密着させ擦り付ける

「こ…外だよぬっくん
こんな場所で
本当にしちゃうの？」

俺は壁に手を付いた焼塩を
後ろから激しく突く

「あ…ッ！ぬつくんのが
奥に当たってるッ♥」

焼塩の膣内は食べて貰うのを
待ってた『檸檬』のように
果汁で溢れかえっていた

「あッ…あッだ…ダメえ
これキモチよすぎて」

「いつもより
感じちゃってるよ♥」

普段聞くことのない
女の声を上げる焼塩に

俺は勢いよく腰を打ち付け
子宮口や膣壁を味わう

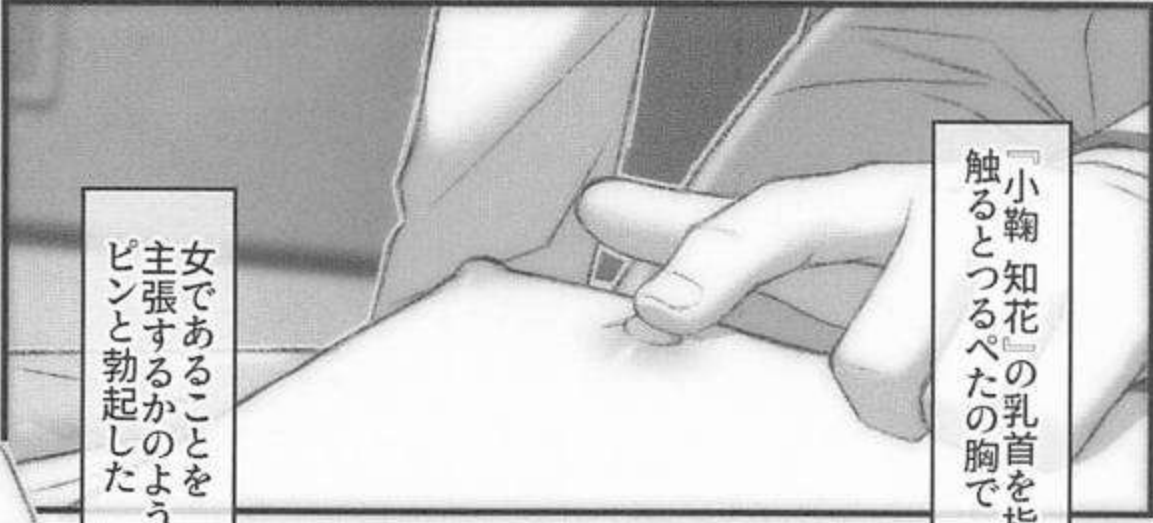
「んッ！んん…ッんッ
ん…ッ♥♥♥」

俺は辺りに響く焼塩の
淫靡な声を唇で奪うと

「ぬつくんッ出して…ッ
私のお宮内に
ピュピュって出して♥」

絶頂が近い焼塩が
大胆なお願いをしてきた

焼塩の絶頂と共に
子宮内へと
射精するのだった



『小鞠知花』の乳首を指先で触るとつるぺたの胸で



女であることを主張するかのようにピンと勃起した

俺は指先に唾液を付けるとさらにその乳首の先を

十字キーの様にクリクリと動かしてみる



眠っている小鞠に悪戯をして

どこまでヤッたら目を覚ますのか俺は挑戦していた

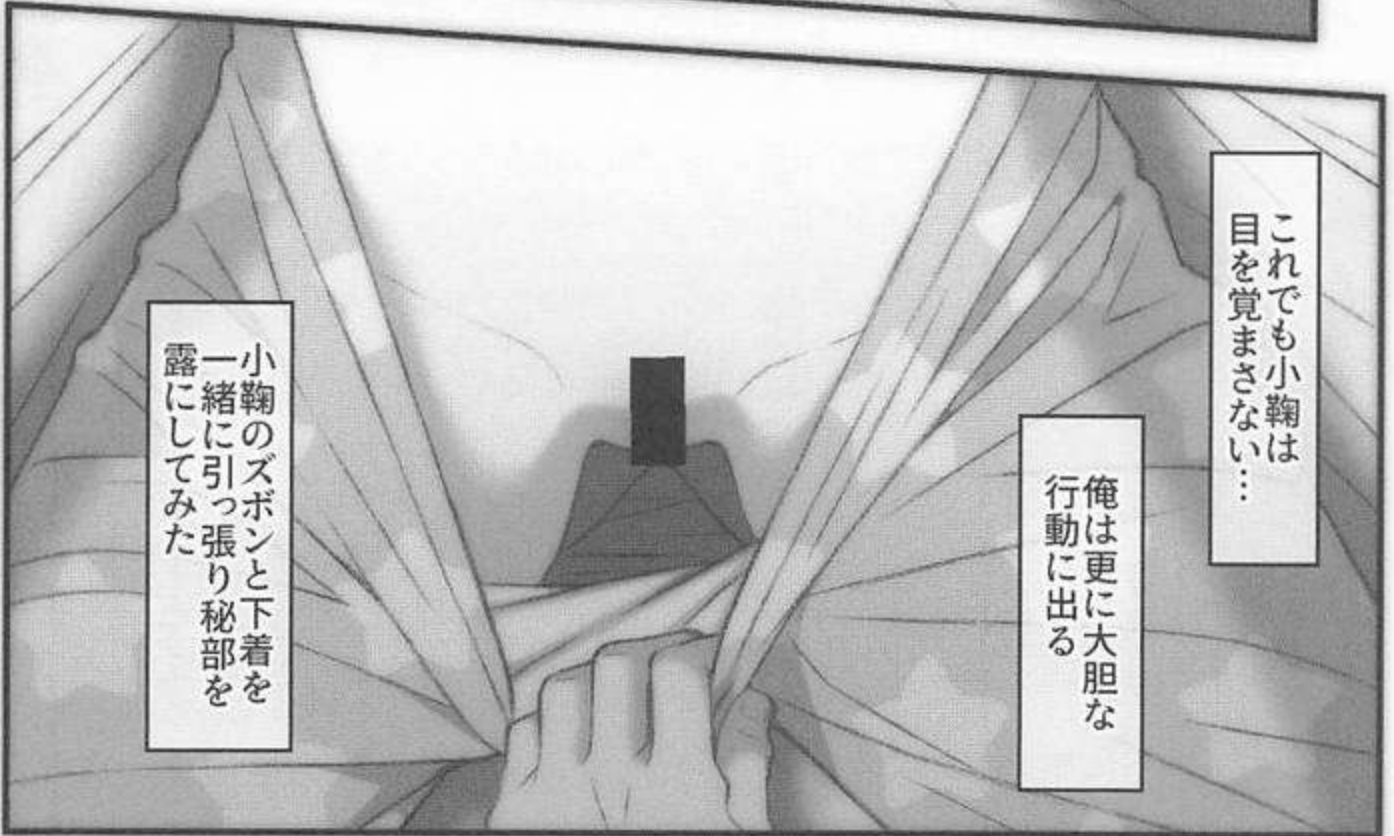


流石にこの程度のことでは小鞠は起きそうに無い

小鞠のパジャマ越しのアソコの辺りを押してみる

グリグリとそれ程強くない力でアソコを押してみると

パジャマの皺が恥丘のシルエットを形成してエロく見えた



これでも小鞠は目を覚まさない…

俺は更に大胆な行動に出る

小鞠のズボンと下着を一緒に引っ張り秘部を露にしてみた



そして小鞠の下半身を丸出しにして

さらに大胆なイタズラをしてやろうと思う

俺が小鞠の顔にチンポを近づけると……

「温……水……」

小鞠が俺の名を呼んで目の前のチンポを咥えた

モニュモニュと口を動かし堪能する小鞠だが……

「お前のソーセージは粗末で小さい……」

寝言で自慢のチンポを小さいと言われた俺は

ツルツルの小鞠のマンコに挿入をしてセックスを始めてしまった

「お……おしっこ……」

小鞠の寝言と共に俺の下腹部に生暖かさと尿の匂いが広がっていく

俺は小鞠を上に乗せると下から奥をズンズンと突く

「ん……ん……う」

フラフラと揺れる小鞠を支え
なかに
膣内射精してやろうとしたその時

オシッコを出し終わった小鞠が
ついに目を覚ましたのだ

「ぬあッ!? ベ……ッ便座が
温水に変身した!」

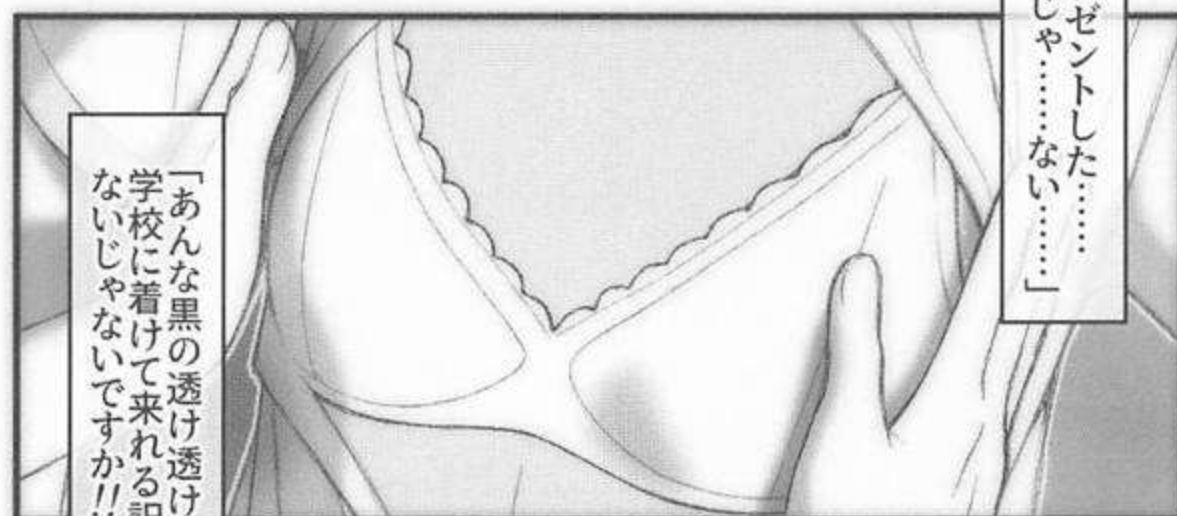


「ひゃう！」

天愛星さんの可愛い
悲鳴が聞こえた

二人が暗がりの中でナニを
しているのか凝視してみると

「プレゼントした……
ブラじゃ……ない……」



「あんな黒の透け透けを
学校に着けて来れる訳
ないじゃないですか!!」



『馬刺天愛星』と
志喜屋先輩を発見した

俺が部室に向かう途中で
階段脇の暗がり



どうやらレズブレイの
真っ最中だったようだ

邪魔をしたら悪いと
思っただ俺は挨拶をして

その場を
離れようとする……



「見てないで助けて下さいッ!!」

「そこで……天愛星ちゃんを……
見て上げて……」



真逆の言葉を掛けられ
判断に迷った俺は

先輩の命令に従い
『百合ブレイショー』を
堪能することに決めた



「いつもより……
感度が高くて……善き……」

「視姦^{みかん}られてる方が……
天愛星ちゃんは……感じる？」



志喜屋先輩の腕が股の奥に
グツと押し込まれた瞬間

「あ……あッ
ツッ!!」

ビクビクと激しい痙攣を
起こす天愛星さん



「ど……ッどどど……に
手を入れて!? ひゃいんッ!!」

「駄目ですッ!そこ
弄らないで下さいッ!!」

最小の動きで天愛星さんの
抵抗を掻い潜り

的確に性感帯を刺激する
志喜屋先輩



足に力が入らなくなったのか
天愛星さんは

その場にヘナヘナと
へたり込んでしまった

志喜屋先輩は放心状態になった
天愛星さんを一瞬で全裸にすると

自らも制服を脱ぎ
彼女の身体に密着する

「せ……っ先輩
もう止めて……下さい」

「天愛星ちゃんの……
エッチな姿……温水君に……
もっと視姦してもらお……」

今まで聞いたことのない
エッチな声を出す天愛星さん

志喜屋先輩は
天愛星さんのアソコに
自分のアソコを密着させ

腰をクネクネと動かし
互いのクリトリスを
擦り合わせた

「天愛星ちゃん……
一人でする時……」

「いつもクリトリス……
弄ってるの……知ってる……」

「そこ弱いんですッ
あっ！あっ！駄目ですッ!!」

天愛星さんは生徒会室で
そんなことをしていたのか

今度こっそり覗きに
行ってみるか



「あッ絶頂……ッッ!!」

天愛星さんの嬌声が廊下にまで響き渡る

俺は思わず廊下の先を見渡し人がいない事を確認した



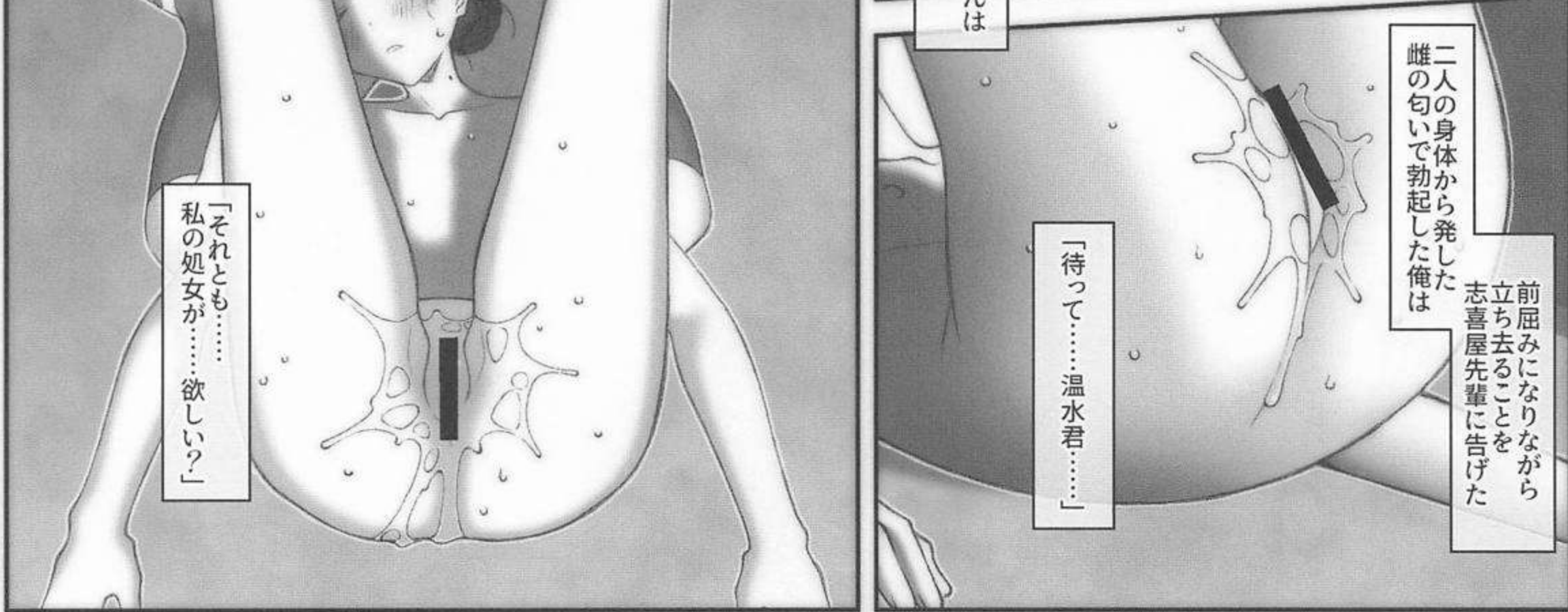
「可愛かったよ……天愛星ちゃん……」

「志喜屋しえんぱい……」

それだけを言うと天愛星さんは気を失ってしまった

「温水君……天愛星ちゃんの処女……欲しい……?」

そう言うと志喜屋先輩は天愛星さんの股を広げた



前屈みになりながら立ち去ることを志喜屋先輩に告げた二人の身体から発した雌の匂いで勃起した俺は

「待って……温水君……」

「それとも……私の処女が……欲しい?」

「保健体育のテスト勉強を
していたら」

「志喜屋先輩にこの服を
着せられたんです!!」

相変わらず志喜屋先輩の
玩具にされる『馬判 天愛星』

何故か保健体育の
テスト勉強を始める
天愛星さん

「こっっっこれが
男子の性器…なんですね」

俺のパンツを引っ張り
中を覗き込む

「実物は図解のように
グロテスクな形では…え!」

俺は天愛星さんの目の前で
ペニスを勃起させてしまった

「まさか私の淫らな姿を
想像して大きくしたんじゃない?」

「つ…っ次は
私の番ですよね…」

「前から見られるのは
恥ずかしいので
後ろから観察して下さい」

天愛星さんは
タイツを下ろすとお尻を
こちらに向けてきた

天愛星さんに
気づかれないよう
俺は菊門に舌を這わせる

「っ!? 触って欲しいとは
言っただけ…っで
何処を舐めてるんですか!」

「ふあああッ!
や…っ止めてください!!」

志喜屋先輩から天愛星さんが
アナルも弱いと聞いていたが

こんな簡単に絶頂するとは
思わなかった

「ひぐ…ッ!」

俺と天愛星さんは
セックスを始めた…

「温水さんこれはあくまでも
勉強ですからね!!」

「そのところは絶対
間違えないで下さいね!!」

テスト勉強で実践まで
するのと思うが?

「温水さん…このまま
続けていたら男子は射精を
するんですよ?」

天愛星さんは
暗に子宮内射精を
要求しているようだ

「少子化も進んでいますし
子育てを学ぶのも大切な
勉強だと思うんです!」

「何度も言いますがこれは
勉強ですからね!」

「本当に只の
勉強なんですからね!!」

俺は天愛星さんの
一番深い所で射精する

「はあ…はあ…はあ…
これで明日の保健体育の
テストはバッチリです」

保健体育だけ高得点を出すのも
それはそれで恥ずかしいと思うのだが

余韻に浸る天愛星さんには
黙っておくことにした

取って欲しいと言われた
振動するボタンを求めて

俺は『白玉リコ』の
ウェディングドレスの中に
潜り込んでいた

「隠す場所が無かったので
下着の脇に
止めていたのですが…」

「動いているうちに
下着の中心に落ちてしまい」

膝を着いて見上げると
そこには

愛液で濡れそぼった下着と
雌の匂いを放つ股間が

俺は小陰唇の隙間から覗く
クリツカーの片割れを摘まむ

「ッ……ああ!？」

ヌルヌルで滑るボタンを
俺は慎重に引き抜いた

白玉さんに取れたことを
告げた俺は

スカートの中から
外に這い出る

すると…ウェディングドレスの
胸元を下ろした白玉さんが
恥ずかしそうに呟く

「ぶ…ッ部長さん…私
このままじゃ出れません…」

「私と…その…私とセックス
して頂けませんか？」

俺は白玉さんの白玉の様な
プニプニおっぱいを握る

それは吸いつくように柔らかく
ずっと揉んでいた感触だった

柔らかい手触りを楽しんだ
次は食感を楽しむ

「オッパイを吸ってる部長さん…
まるで赤ちゃんみたいです♥」

白玉さんの熱を帯びた声を
聞きながら甘噛みをする

乳房の中心に
小さな突起が出現した

「ああッ……部長さん
乳首がキモチいいです♥」

白玉さんは俺の頭を
抱きかかえ

甘やかすように
頭を優しく撫でてくれた

ウェディングドレスを捲り
準備の出来上がった
白玉さんの秘部に

俺はチンポを
そっと押し当てる…

接触の感覚に反応した
白玉さんは…

「お願いします…」っと
小さく呟いた

入口の柔らかい場所から
拒むように狭くなる

「ん……あッ！ああッ
部長さんが私の中に入って…」

俺は奥へ奥へと
ゆつくりと腰を進めた



「それもこの様な記念日に」

「……こんな形で卒業する
なんて思いませんでした……」



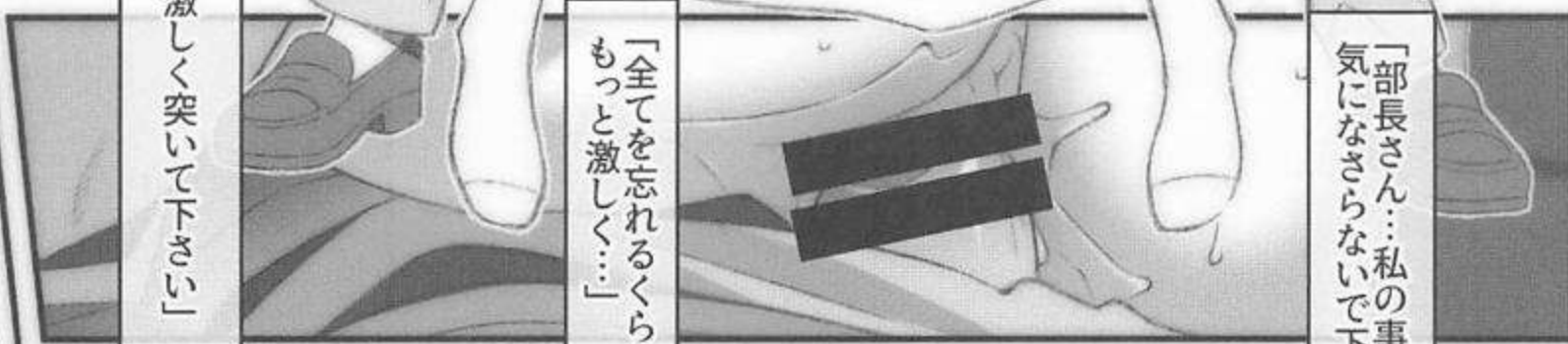
白玉さんは破瓜の痛みに
耐えながら

俺の動きに腰を合わせる

俺は彼女に遠慮して
浅い場所を攻めていたが……



「ぶ……部長さんが奥に当たって
コレ……あッああ……凄いかもッ」



「部長さん……私の事は
気になさらないで下さい」

「全てを忘れるくらい
もっと激しく……」

「激しく突いて下さい」



物足りなさを感じていた俺は
白玉さんの言葉に甘え

彼女を抱き抱えると
深くつながれる体位に
体勢を変えた



埃まみれの床に腰を下ろした

絶頂する瞬間の白玉さんを見たいと思った俺は



白玉さんは熱を帯びた吐息で俺の耳元で囁く



「部長さんを私の膣内へ注ぎ込んでください…」

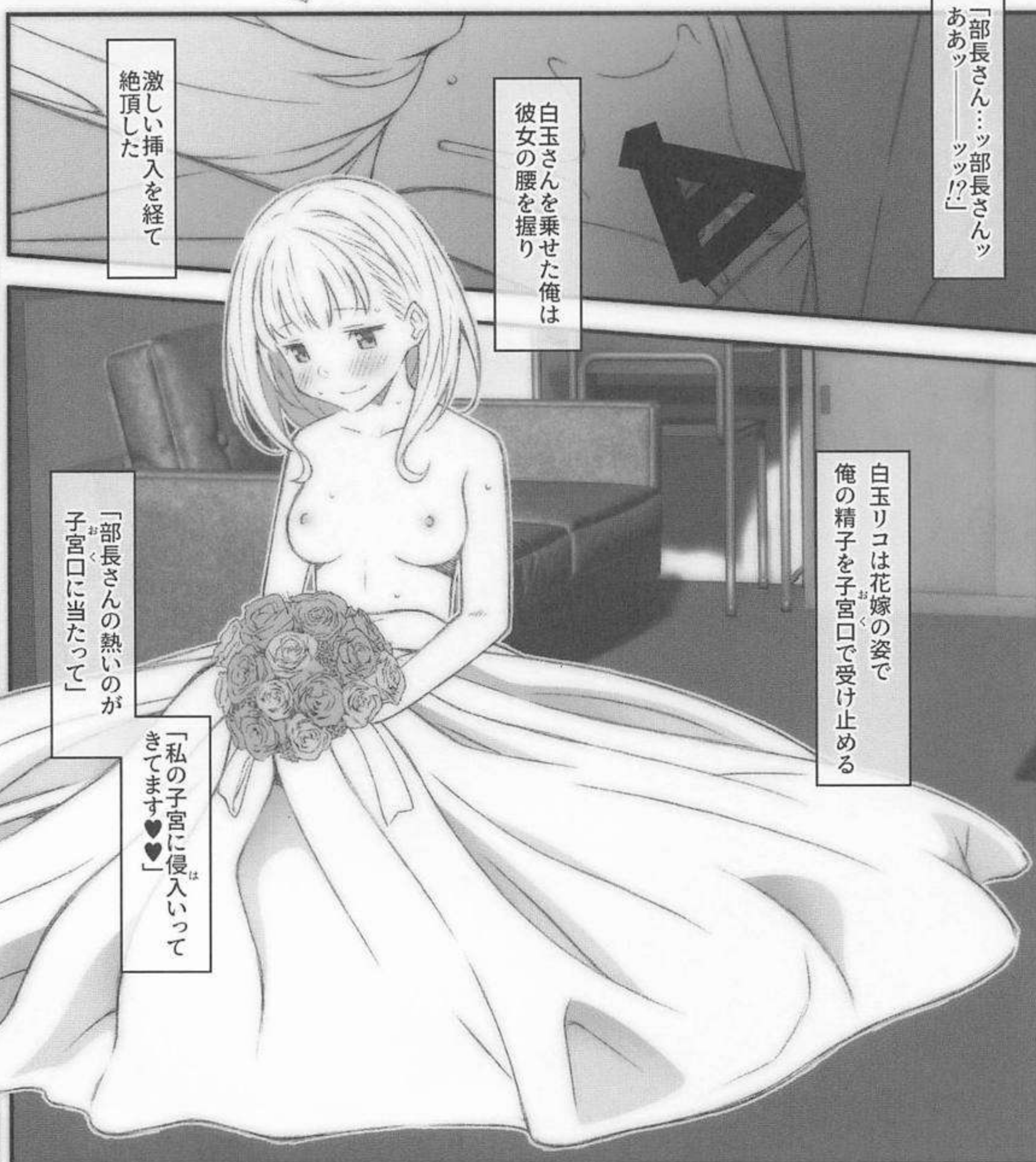
「妊娠しても構いませんこのまま部長さんを…」



「それじゃ行ってきますね部長さん♥」

そう言う白玉さんは実姉の結婚式に参加する為部室を出て行った

俺の精子をその子宮に溜めたまま…



激しい挿入を経て絶頂した

「部長さんの熱いのが子宮口に当たって」

「私の子宮に侵入いってきます♥♥」

白玉さんに乗せた俺は彼女の腰を握り

白玉リコは花嫁の姿で俺の精子を子宮口に受け止める

「部長さん…ッ部長さんッああッ…ッッ!」



ん……

この精子の濃さだと…
今日のお兄様は
7回でしょうか？



「お兄様♡佳樹の口の中に
射精して下さい♡」

ピュッピュッと
お兄様の情熱的な精子が
佳樹の口の中へ放たれ

その放たれた精子を
私は舌先で転がしお兄様の
今日の成果を確認します



太陽のように明るく
とても綺麗な『焼塩檸檬』さん



生まれた時からこの先も
ずっと一緒のわたし『温水 佳樹』



美味しくご飯を食べてくれる
素敵な『八奈見 杏菜』さん



家庭的で親しみやすい
『小鞠知花』さん



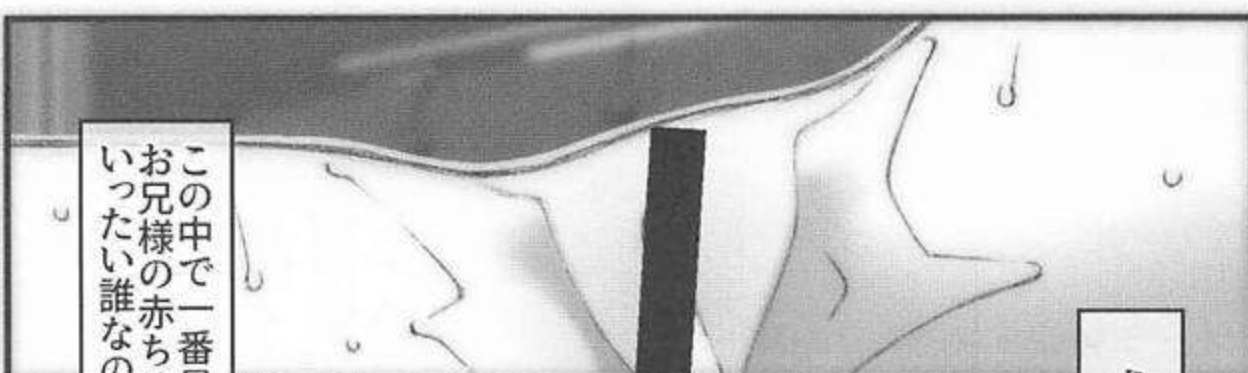
文芸部の後輩で
キャラ被りの『白玉リコ』さん



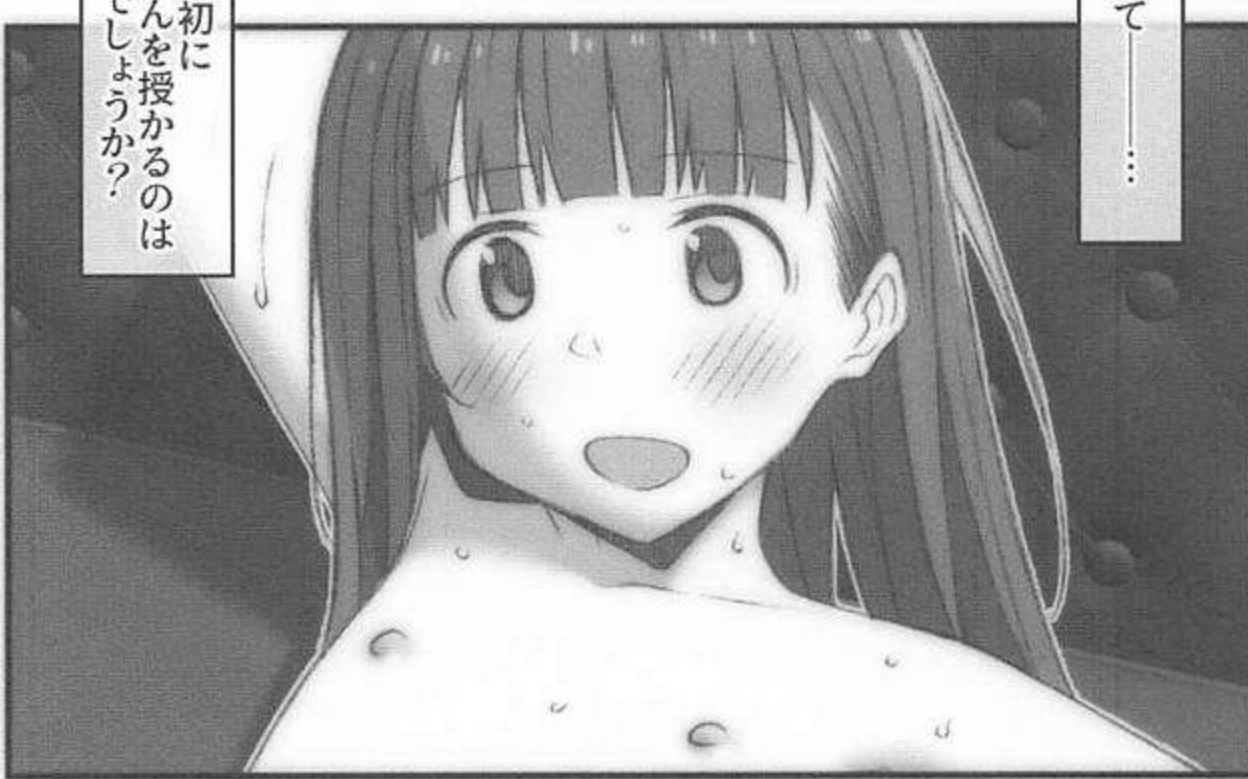
いつも一生懸命な
生徒会副会長の
『馬剃天愛星』さん



順調にお兄様の愛は
広がっているようです♡



さて……



この中で一番最初にお兄様の赤ちゃんを授かるのは
いったい誰なのでしょう？



■作品名:TYPE-73 spec-02
■発行日:2025/11/23(初版)
■発行元:TYPE-S7
■発行者:Frunbell
■連絡先:frunbell@yahoo.co.jp
■Discord ID:frunbell
■印刷所:ねこのしっぽ
■注意:18歳未満の閲覧禁止 無断転写・転載・複製禁止



TYPE-73

SPEC-02

THE LOSING HEROINES!!
SISTER TOWABUKI SCHOOL GIRLS